

“もの”は どこで作られ どこへ行ったの？

～ 古代埼玉の生産と流通 ～



勾玉

水晶の輝き

勾玉は、主に古墳時代以降に特別な装身具として多く作られますが、そのルーツは縄文時代にまで遡ります。また、その材料には、加工しやすい滑石のほか、しばしばヒスイ・メノウなどの美しい石材が用いられています。中でも硬く透明な水晶製の勾玉は、数も少なく貴重な存在です。

玉作り工房の発見

平成 18・19 年度に東松山市反町遺跡^{そりまち}、桶川市前原遺跡^{まえはら}と、相次いで水晶の玉作り工房が発見されました。何れも古墳時代前期(約 1,700 年前)のもので、水晶の勾玉作り工房としては全国でもっとも古い発見例です。残念ながら水晶製勾玉の完成品は見つかりませんでしたが、建物には特殊な作業場があり、加工途中の水晶や破片がたくさん出土しました。



水晶の原石 桶川市前原遺跡^{まえはら}

勾玉はどこへ？

水晶の勾玉は、透明な硬い石材と加工の難しさから、非常に特殊で貴重な装身具と言えます。ふつうは古墳の石室などから見つかりますが、その工房跡が発見されたことは、「わざわざ作らせた有力者」がいたことを示しています。

反町遺跡の周辺には、諏訪山 29 号墳・高坂 8 号墳などをはじめ、工房と同じ時期の古墳が数多く分布しています。(右下図)あるいは、これらの古墳に葬られた人やその一族が、遠くから工人を集め、水晶を取り寄せて勾玉を作らせたのかもしれません。



発見された工房跡 東松山市反町遺跡^{そりまち}



古墳から出土した水晶の勾玉
東松山市高坂 8 号墳^{たかさか}
(東松山市教育委員会所蔵)



水晶はどこから？



水晶の産地

石英は砂などにも含まれる一般的な鉱物ですが、それが無色透明で六角柱状のきれいな自然結晶となったものを「水晶」と言います。国内でもいくつかの産地が知られていますが、県内では見つかっていません。

また、両遺跡の水晶を詳しく観察すると、結晶内部に緑色の針状物質が含まれているものが多く見られます。これは、山梨県の竹森鉱山で採掘される水晶の特徴(緑色の鉱物を含み「草入り水晶」と呼ばれる)に似ており、遠く山梨県から原石が運ばれてきた可能性が考えられます。

土師器

—はじき—
“かたち”の交流

弥生時代から古墳時代へ移り変わるころ、埼玉県でも低地の開発が進むとともに、いろいろな“かたち”の土器が現れてきました。このころ、西日本の各地から埼玉県を含む東国に、人々が様々な技術・情報・ものを携えて移り住んできました。その結果、地元との交流が盛んになり、いろいろな“かたち”の土師器が作られました。

人・土器・情報の移動

いろいろな“かたち”の土師器は、大きく分けて畿内地方、北陸地方、東海地方から人・土器・情報が移動してきて、地元の文化と交流した結果作られたものと考えられます。～系土器などと表現しますが、各地域との交流を表す指標となります。



交流の度合い

いろいろな“かたち”の土師器は、交流の度合いを次の3段階で表わすことができます。

レベル0…人とともに直接持ち込まれた土器(搬入品)。生産地の土器。
レベル1…移動してきた人がこちらで作ったか、地元の人を指導して作らせた土器(忠実な模倣品)。良く似ているが、胎土などが違う。

レベル2…情報を得て、地元でまねて作った土器(模倣品)。模倣を繰り返して作ったのか。だいたい似ている土器。

地元の土師器

古墳時代初頭の地元の土師器は、五領式土器と呼ばれています。弥生時代から続く地元の土器群と、他系統の土器群が組み合わさる場合が多く、この時期の盛んな文化交流を物語っています。

埴輪

土のモニュメント

古墳の墳丘には、死者を送る儀礼として家・器財・人物・動物を模したさまざまな埴輪が立て並べられました。これらは素焼きの素朴な粘土による造形品ですが、その多彩な姿は古墳時代における人々の信仰や生活のようすを生きいきと今に伝えています。

埴輪はどこで作られた？

埼玉県内には、埴輪を製作した遺跡が 12 箇所見つかっています。関東地方では最も数が多く、埴輪を焼いた窯跡も 100 基以上発見されています。

埴輪窯跡の多くは台地や丘陵の斜面に並んで築かれていますが、鴻巣市の生田塚遺跡や深谷市の割山遺跡では平坦な場所に、いくつかの窯が一つの灰原を共有する八手状に築かれたものが見られます。



八手状にのびる埴輪窯跡 鴻巣市生田塚遺跡



生田塚産の円筒埴輪
久喜市小沼耕地 1 号墳



生田塚産の女子埴輪
鴻巣市新屋敷 17 号墳

埴輪のさと～鴻巣市生田塚遺跡～

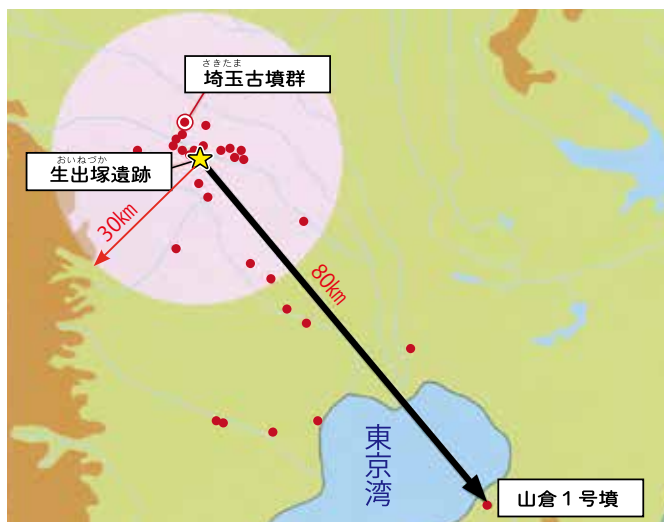
生田塚遺跡は、6 世紀を中心に操業された関東最大規模の埴輪生産遺跡です。これまでに 40 基の埴輪窯跡をはじめ、工房跡や粘土採掘坑などが見つかっています。ここでは関東地方で見られるほとんどの種類の埴輪が生産されていました。

生田塚産の埴輪は、鉄分を多く含む粘土によって作られているため、強い赤味をおびているのが特徴です。

遠くへ運ばれた埴輪

生田塚遺跡で作られた埴輪は、行田市の埼玉古墳群など周辺の古墳へ運ばれていました。それらの古墳は生田塚遺跡を中心に半径 20 ～ 30km 圏内にあります。しかし、その範囲をこえた遠くの東京湾沿岸の古墳からもよく似た埴輪が見つかっています。

直線距離で約 80km も離れた千葉県市原市の山倉 1 号墳が最も遠く、元荒川か荒川を、舟を使って下り東京湾に出て、埴輪を運んだものと考えられます。埴輪の生産と流通の様子を知るうえで大変貴重です。



生田塚遺跡から埴輪が運ばれた古墳
(国立歴史民俗博物館 2003 『はにわ一形と心』を改図)

須恵器とは、古墳時代から奈良・平安時代にわたり、日本で生産された陶質土器をいいます。それまでの土師器とは異なり、成形にはロクロ、焼成には窯を用い、青灰色で硬く焼きしめています。

用途的には日用品と葬祭用品に大きく分けられ、前者は貯蔵・供膳・調理用などの容器が大半を占めます。

初期の須恵器

須恵器の技術は4世紀末～5世紀初頭の頃、朝鮮半島南部の伽耶地方から渡来した工人たちが日本へ伝えたもので、5世紀の初めには大阪府南部の陶邑窯で生産が開始されたと考えられています。

この陶邑窯産の初期須恵器は、大部分が日本各地の有力な古墳、あるいは祭祀遺跡のような特殊な場所から発見されています。まだまだ日常に使用するものではなく、地域の豪族が権威を象徴する宝器、あるいは祭器として入手していたのでしょう。



高坏
しろしき
東松山市城敷遺跡第37号住居跡

埼玉における須恵器生産の開始

6世紀に入ると、須恵器の生産は全国的な広がりを見せるようになりますが、埼玉では6世紀前半の末頃、東松山市の桜山窯で始まります。製品には、蓋・坏・高坏・甕・壺・器台・提瓶・ハソウ・鉢があります。ただ、いずれも器肉は厚く、表面は淡灰色で温度の低い焼成です。

桜山窯で焼かれた須恵器は、この頃に形成され始めた群集墳の副葬品として主に流通したようです。

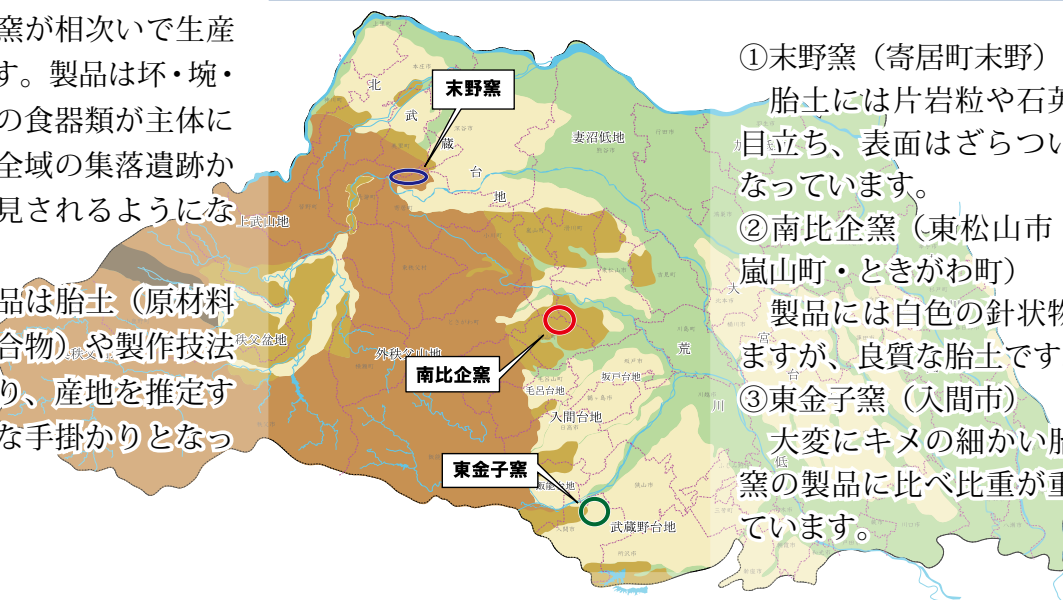


ゆうがいたかつき ふた
有蓋高坏・蓋
さくらやま
東松山市桜山窯跡

埼玉の三大窯

7世紀以降の北武蔵（埼玉）では、末野窯・南比企窯・東金子窯という規模の大きな三つの須恵器窯が相次いで生産を開始します。製品は坏・碗・皿・蓋などの食器類が主体になり、県内全域の集落遺跡から数多く発見されるようになります。

各窯の製品は胎土（原材料の粘土や混合物）や製作技法に違いがあり、産地を推定する際の大きな手掛かりとなっています。



①末野窯（寄居町末野）

胎土には片岩粒や石英粒などが目立ち、表面はざらついた感じとなっています。

②南比企窯（東松山市・鳩山町・嵐山町・ときがわ町）

製品には白色の針状物質を含みますが、良質な胎土です。

③東金子窯（入間市）

大変にキメの細かい胎土で、他窯の製品に比べ比重が重くなっています。

施釉陶器

高級食器の誕生

施釉陶器は奈良・平安時代に作られた色鮮やかな陶器です。素地の器に釉薬をかけて二度焼きすることで、緑色に輝きます。

埼玉県内で出土する施釉陶器は多くはありません。日常食器である土師器・須恵器とは異なる高級な器として扱われていたのでしょう。

施釉陶器の技

奈良時代には中国の唐三彩の技術を取り入れて奈良三彩を作り、平安時代になると中国の青磁や白磁を模して、緑釉陶器や灰釉陶器を作るようになりました。

緑釉陶器…素地を焼いた後、鉛が入った釉薬を施してもう一度焼いて作ります。釉薬に酸化銅を配合することで緑に発色させています。

灰釉陶器…素地に植物の灰を原料にした釉薬を施して焼くことで、淡い緑に発色します。



さんそくばん 上里町中堀遺跡 (猿投産)



りんかわん 上里町中堀遺跡 (猿投産)



りんかわん 熊谷市北島遺跡 (猿投産)



みみざら 上里町中堀遺跡 (浜北産)



こうだいつくわん 神川町青柳古墳群 (猿投産)



しょうへい 上里町中堀遺跡 (浜北産)

どこで作られたの？

施釉陶器の主な生産地



施釉陶器を作るには高い技術が必要だったことから生産地が限られていました。

愛知県、岐阜県、静岡県などが主な生産地で、埼玉県内では作られていません。

どこへ行ったの？

施釉陶器が出土する遺跡は限られています。

特に緑釉陶器は貴重で、県内では約 40 の遺跡でしか出土していません。なかでも 100 点以上もの器が出土した上里町中堀遺跡、熊谷市北島遺跡、飯塚北遺跡には、高級な器を入手できる地位にある人々がいたのでしょう。



りんかわん 熊谷市北島遺跡 (猿投産)



金付着灰釉陶器 (猿投産) 上里町中堀遺跡



熊谷市北島遺跡出土の緑釉陶器

農具や武器などの鉄製品は、弥生時代には朝鮮半島を通して伝えられ、それらを鍛え直した鍛冶遺構もしばしば見られます。しかし、素材としての鉄を作り出すためには、はるかに高度な技術が必要であり、日本での本格的な鉄生産は古墳時代の到来を待たなければなりませんでした。

鉄づくりの科学

古代の製鉄炉では、鉄鉱石や砂鉄などの材料と炭を交互に入れ、1200度以上の高温を保ちます。すると、高温の炭から出た一酸化炭素と溶けた炉材（粘土）が不要な酸素と不純物を取り除き、最終的に炉の底に鉄分の多い塊（鉄塊）が作られるのです。もっとも、製品の材料としての「鉄」にはまだ遠く、これらを再度加熱し、槌などで打って不純物を分離し、炭素量を調整する鍛冶の工程が不可欠です。



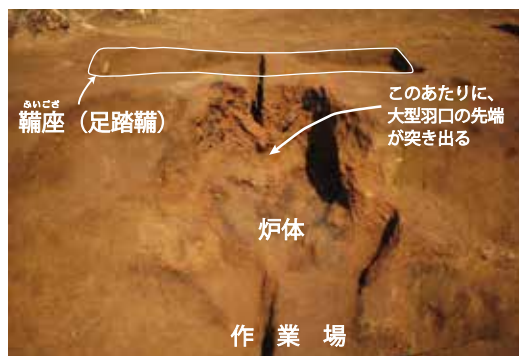
遺跡に残された鉄の塊
さいかいぎだ
川口市猿貝北遺跡



おおがたはぐち
大型羽口（炉内に風を送る管）
おおよま
伊奈町大山遺跡

製鉄の歴史

朝鮮半島などから持ち込まれた鉄を材料にした鉄器の生産は弥生時代に遡りますが、国内での本格的な鉄生産は古墳時代後期（6c 後半～7c）以降となります。製鉄炉は、初期には平面形が長方形の（風呂桶のような）「箱形炉」が主体で、西日本を中心に分布しますが、奈良時代に入る頃には、律令国家の拡大とともに急激に東日本でも作られるようになります。やがて、東日本では踏鞴（足で踏む鞴）を備えた半地下式竪型炉が出現し、広く使われるようになります。



平安時代の製鉄炉 伊奈町大山遺跡



製鉄の様子（想像図）

鉄はどこへ？

古代の製鉄炉で造られた鉄は、不純物や炭素の含有率が高く、再度高温にして鍛え直す精錬工程（大鍛冶）を経てから各地の工房（小鍛冶）で製品として作り出されました。

また、作られた鉄は、含まれる炭素量によって大きく二種類に分けられます。炭素量の少ないものは武器や農具・工具など、言わば利器を作るのに用いられ、多いものはもっぱら鉄鍋や釣鐘・仏具など鋳型に流し込んで製品を作る鋳造に用いられます。

なお、鉄製品は非常に錆び易いため土中では残りにくく、古代の流通の実態に迫るのは、まだまだ難しいのが現状です。



いろいろな鉄の道具



“もの”は どこで作られ どこへ行ったの？

ほろ展 2014

～古代埼玉の生産と流通～

熊谷 八木橋百貨店

平成 26 年 8 月 14 日（木）～ 18 日（月）

秩父 矢尾百貨店

平成 26 年 8 月 28 日（木）～ 9 月 1 日（月）

大宮 DOMショッピングセンター

平成 26 年 10 月 2 日（木）～ 7 日（火）

埼玉県立さきたま史跡の博物館

平成 27 年 2 月 7 日（土）～ 3 月 1 日（日）

主催／公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

共催／埼玉県教育委員会

埼玉県立さきたま史跡の博物館

秩父市教育委員会

後援／熊谷市教育委員会

協賛／株式会社八木橋

株式会社矢尾百貨店

大宮西口共同ビル株式会社

平成 26 年 8 月 11 日発行

編集・発行／公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

369-0108 埼玉県熊谷市船木台四丁目 4 番地 1

電話：0493-39-3955

<http://www.saimaibun.or.jp>